
とある家族の一家団樂

スザク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある家族の一家団欒

【Nコード】

N9292L

【作者名】

スザク

【あらすじ】

二次創作「とある科学の事件体質」の外伝です。

事件体質の方での主人公綾峰唯鷹を中心にしたとある家族達の物語です。

登場人物

父親：?????

母親：月詠小萌
長男：?????
次男：?????
三男：綾峰唯鷹
四男：一方通行
長女：?????
次女：?????
三女：御坂美琴
四女：ミサカ10032号
五女：?????

?????は未登場の家族です。

V S 四男

ピンポンパンポン

この作品は本編、『とある科学の事件体質』とはいっさい関係ないものだとご了承下さい。

出てくる登場人物は本編とも、原作ともまるで関係ありません。

なお、本編をシリアス：ギャグ＝5：5といった感じなのに対し、この作品ではシリアス：ギャグ＝0：10です。

また、この作品は以下の要素を含めます事をあらかじめご了承下さい。

- ・登場キャラのほとんどがキャラ崩壊してます。

以上。

あと、若干設定を組み替えたところもありますが、この作品の流れとはあまり関係ないのでスルーしてもらえれば良いと思います。

とある科学の事件トラブルメーカー体質外伝
とある家族のオリジナルメーカー一家団欒 第1話

平日、午前10時。

幼稚園児は幼稚園、学生ならば学校に、社会人なら職場へ、それぞれ向かった後の時間帯である。

主婦なら家事を行う時間だが、うちの場合は既に食器はそれぞれが、洗濯は朝一に終わっている。

ちなみに掃除はやる気が起きないし、女の多いうちの場合、下手に部屋に入るとメンドクサーことになるのでパス。

「だあー、暇だ。メンドクセー」

俺はそんな自宅のリビングで寝転びながら呟いた。

テレビは幼稚園児以下の年齢の子供や主婦向けの番組しかやってないのでやることがない。

やっぱ、学校の創立記念日ってのはメンドクセーものだ。

5月の中旬、そんな中途半端な時期に創立されたのはうちの高校くらいで、平日の今日、家族は全員学校や職場に向かってしまっている。

同じ高校の友人達はそろいもそろって、補習だそうだ。

「上条ちゃん、バカだから補習ですー」と電話口で母親が言っていたのを思い出す。

はあ、とため息を吐くと、俺はとりあえずどこか散歩に行くのも良いか、と思って部屋に財布を取りに行く事にした。

2階にある自室に入ったところでふと、思いついた事を実行してみる事にした。

パソコンの電源を入れる。

軽快な音と共にパソコンが起動して行く。

僅か数秒で起動し、デスクトップ画面が表示される。

学園都市で最も速いパソコンと言われて買って見たのだが、予想外に速く、相変わらず驚かされる。

「よし、始めっか」

フォルダの1つを選び、オンラインゲームを起動する。

ログイン後、すぐに画面に表示されるのは剣や杖を持った三等身のキャラクター達で、よくある魔法と剣のRPGだ。

9人家族の上から4番目と言う事で、年がちょうど一番上とも下と

も近いせいか、色々家族の趣味に付き合うので、このオンラインゲームはたくさんある俺の趣味の1つだったりする。その中で最もレベルの高い剣と杖を持つキャラクターを選ぶと俺はゲームの世界に入っていく。

オンライン上に作られた街にいる俺はチャット画面を開き、この時間帯でログインしてるプレイヤーに声をかけた。

『おーい、イツコウ。元気？』

俺の問いかけにすぐに返事が返ってくる。

『(O^ ^)ノやあやあ、元気だぜ』

俺がそれに答える前に相手からの追伸が来る。

『それにしてもこんな時間にどうした？学校は？)・・(』

『今日は創立記念日だから、休みなんだ』

『マジか。羨まします(。・(』

『ああ、って言う訳で昼前まで暇なんだが、どうする？』

昼になったら昼飯を作らねばならない。

うちに冷凍食品は基本的に無い。

あっても弁当用の細かなおかずばかりだ。

だからうちの一家でまだ小学生の末っ子以外はこつという休みの日は自炊するのがルールである。

俺の問いかけにイツコウは数秒、悩む様に、

『……………』

という返事をしてくる。

『補助キャラのレベル上げでもするか？それともどっか新しいダンジョンあれば行くか？』

俺が適当に選択肢を提示する間に、相手は考え決まったのか、

『んー、だったらちよいと付き合っしてほしいところあんだけど。良いか？（）（）』

『どこにすっら？どこでもいいぞ』

おっと変換ミスをしてしまった。

『ちよいとこっち来てくれ』

『今どこー？』

『あ、部屋の方』

一瞬だけ俺は目を疑うが、すぐに意を決し返事を書いた。

『おk、今から行く』

それだけ書くと、オンラインゲームからログアウトする。

パソコンをすぐに終了させ、部屋を出ると、2階の廊下を歩き、最も奥にある部屋に向かう。

うちは基本的に 1階に兄さん達や姉さん3人とまだ小学生の未っ

子と母親の部屋があり、2階に俺以下弟や妹達5人の部屋がある。そして2階の中でも一番奥、扉に『いつもの部屋』と書かれたクジラの可愛いプレートがぶら下がってる。俺は扉にノックをする。

「開いてるぜエ」

中から声が聞こえて来るので、部屋に入る。

扉を開けるとまず初めに見えたのは自分の開けた扉と壁の隙間から漏れる光だった。

部屋の中は暗く、窓は遮光カーテンによって閉じられており、唯一の光はパソコンの画面だった。

「相変わらず、暗い部屋だな」

俺は感想を述べながら部屋の中に入る。

部屋は12畳程の大きさでその住人はベッドの上でシーツに包まっていた。

白い髪に、爛々と灯る紅い瞳。

肉食獣を彷彿させるその瞳を見ながら、相変わらず自分に似ていない弟だため息を吐く。

俺のため息に弟は勘違いしたのかいらつく様に舌打ちをする。

「ンだよ？引きこもりが悪いかよオ？」

おっと、弟がすねそつだ。

「いや、そう言う訳じゃねえよ。単純にうちの一家はどいつもこいつも似てないなあと思っただけだ」

「…ああ、確かに」

うちの一家はどいつもこいつも似ていない。

妹の三女と四女の双子と末っ子が似てるっちゃん似てるっていうぐらいだ。

その上、どいつもこいつも母親に似ていない。

おかしいなあ。一応全員母親の腹から生まれて、しかも全員親父も母親も同じはずなんだが…。

ま、母親の身長が似なくて良かったなと俺は少し思ってるから俺としては別に良いが。

つと、そんなことより今は目の前の弟だな。

先ほども言った通り、俺と弟は似ていない。

俺は黒髪の典型的な日本人で前に姉さんに「あんたって平々凡々で特徴がないってのが逆に特徴よね」と思いつきり言われたくらいだ。それに対し、弟はまっ白い。

何が白いって、髪、肌、どれをとってもだ。

正直、頑張ってる姉さんや妹達には悪いが、うちで一番の美白はこいつだろう。

何でも能力の関係で紫外線が当たらないから紫外線を防ぐための色素もいらぬそうだ。

俺としてはそのチート能力がうらやましいと思うの反面、これのせいで弟がひきこもりになったのだから素直にうらやましいとは思えなかつたりする。

「で、一行。出かけるのか？」

俺は珍しく外に出かけようとする弟、一行いっしょに声をかける。

一行は俺の言葉に本来の目的を改めて意識したのか、若干顔を渋らせるが、しばらくして頷いた。

「んじゃ、さつさと着替える」

シート怪人状態の一行にそう言うと、俺はずんずんと奥に入り、部屋を明るくするためにカーテンを開けた。

「ぎゃアアアあああああああ、と、溶けるウ！」

シート怪人が断末魔の悲鳴を上げる。

「溶けねえよ！てか『アクセラレータ一方通行』だろ、お前の能力！これくらい『反射』しとけ！」

ツッコミを入れつつ、俺は一行の部屋の現状を改めて見直す。

うん、今度妹達引き連れて大掃除すつか。同居人いそっだし。

あ、でも電子機器あるし、下手すつと電子機器が一斉ダウンして一行が泣くからなあ。

仕方ない、俺と一行だけでやろう。

「いやア、何かこう言わないとダメな気がする…」

「もう十分ダメだったの。ほら、さつさと着替える」

「ん？この格好じゃダメなのか？」

一行がシートを脱ぐ。

『おめでとう、シート怪人は白黒ジャージ怪人に進化した』

なんか、脳内に某キャラクターゲームの進化シーンの音楽が思い浮

かんだ。

ちなみに、この白黒のジャージは一行が現在登校拒否してる長点上機学園のものだったりする。

「いや、どこに行くか知らんがダメだろ？」

一行の事だから、アキバか近くの家電量販店とかに行きたそうだなと判断した俺の考えだったが一行は怪訝な顔をして尋ねて来た。

「コンビニ行くのにジャージじゃダメなのか？」

「コンビニくらい1人で行ける様になつてくれないとお兄ちゃん困るんだが…」

本気でこの弟が心配になつてきたなあ。

家の中だと飯時は1階に降りてくるし、料理当番制なので一行もちろん料理をするからよく見かけてたからあまり心配してなかったが、こんなに外へ行くための耐性がないとは…。

つい、ため息が漏れる。

一行は俺のため息が聞こえたのか、急に言い訳を口走った。

「だ、だって、外出たら危険じゃねエか、例えば銀行強盗とか」「お前の能力的に普通にお前なら銃弾も跳ね返せるから大丈夫だ…てか相手の銀行強盗の方が危険だろ、その状況」

「だ、だって毒ガスがあるかもしれねエし」

「お前なら大気を『制御』してどうにかできんだろ…てかそんな日常的に毒ガスは散布されてません」

「そ、それに地球が崩壊したら流石に空気なくなるだろうから、俺だって死んじゃウ！」

「大丈夫、そんな時は生き物は全部死んでるから……てか地球そんな簡単に崩壊しないから、地球舐めんな」

「う、うウ」

気弱な一行についたため息が漏れる。

まあ、せつかく一行がコンビニとは言え、出かける気になってるのだから出かける手伝いをしてやるのが兄の役目というものだろう。

「わかった。付き合ってやるから。そうだな、玄関ぐらいまで」

俺の言葉に途中まで輝いた一行の表情が後半の俺の言葉に一気に花が枯れるように暗くなっていく。

がくりとorzの形にひざまずいた一行の背中に哀愁が漂う。

「わ、悪かった。冗談だ。コンビニの入り口まで、な。そこまではちゃんと付き合ってやるから！」

「コンビニの中はどうすんだよ？」

「それは流石に自力でどうにかしてくれよ……」

「うウ……………わアッーた。頑張ってみる」

「おう、その意気だ！」

俺は一行を励ますと、ジャージ姿の一行を連れてコンビニに向かうことにした。

「いらっしやいませえ」

店員の声がコンビニの中から聞こえてくる。

俺の横で一行が震えていた。
かすかに聞こえる声からは、

「無理……………逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ……………うん、無理」

何とも心許ない言葉が聞こえてくるがあえてスルー。

俺は一行とコンビニの自動ドアの直前まで行くと、一行の背中を押す。

『反射』されて、押せねえ。

「こら、一行！行くんじゃないのかよ!？」

「無理!?!てか、あの店員、明らかになんかの道の人だろ!?!」

一行の声に俺は店内をじっと観察する。

すると、確かにレジを打っている店員は金髪で青のサングラスをしていた。

しかし、俺はすぐにその人物を思い至る。

というか同級生なのだが。

「ああ、土御門か…」

バカ三人組の1人である上条が2年生とは言えまだ5月の時点で既に補習なのに、同じデルタフォースに所属する土御門がここでバイトをしているということは、どうやら土御門だけ補習を免れたか、補習を知らずにバイトを入れてたといったところだろう。

一行に土御門が同級生であることを説明し、どうにか納得させ行かせてみる。

「いらつしゃいませえ」

コンビニに入った瞬間かけられた声に一行はビクウツという音が聞こえてきそうな程に身震いすると、そのままの姿勢でベクトルを後ろに向けて返って来た。
器用だな、おい。

「こら、一行。無駄に器用な能力の使い方して戻ってくんなよ」

「だ、だって、いきなり声かけられて…」

「いやいや、単に客への挨拶だから。びびんなよ、それくらいで」

「も、もう一回行ってみる」

がんばれ、と手を振る俺に気づき、土御門が首を傾げているが、スルーだ。

弟のため、俺は恥も外聞も捨ててやるう。

一方、意を決した一行は速かった。

物理的に。

入った瞬間にはベクトル操作で店の奥に行き、雑誌を数冊持ったかと思うと、既にレジにいた。

そして雑誌を置き、財布から万札を置くと。

「釣りはいらねエ」

そう言つて、雑誌と共にコンビニから出て来た一行に、俺は、

「ちゃんと返して貰つて来なさい」

ニツコリ笑つて叱りつかることにした。

「それにしても一行、お前が雑誌買ったためだけにわざわざコンビニに行くなんて珍しいな」

帰り道、雑誌を持つ一行と共に俺は歩いていた。

もうすぐ昼なので早めに帰つて昼の準備をせねばなるまい。

一行も腹を空かせてるだろうし、今日は頑張つたんだから、何かおいしい物を作つてやるか。

と、そんな事を考えてる俺に一行は先ほどの問いの答えを言う。

「とあるゲームの先行販売をするらしいんだけど、そのための応募券がこの雑誌にしかなくて……この雑誌つて、通販じゃ買えないから家族の誰かに頼もうとしたら母さんが『たまには自分で買って来な

さい』って」

「なるほど、母さんらしいや」

ああ、きつと母さんは今日創立記念日で俺しか家にいなくて、俺が一行に声をかける事を計算に入れていたのだろう。

流星は伊達に九児の母親をやっではないいな…。

きつと、母さんとしては一行をどうにか独り立ちさせてやりたいのだろう。

引きこもりがダメ、という事を母さんは言わない。

それも1つの個性だと肯定し、その上でどうにかその子が生きて行ける様に努力し、努力させる。

ま、だからこそ俺らは母さんが大好きなわけだが。

新作のゲームの会話をしたりして家についた俺たちはいつもの生活に戻る。

さきほどおいしい物と言っても俺にできるのは炒飯ぐらいなものだ。弟が弟なりに頑張ったのだ、まあ、俺もがんばろう。

メンドクセーがな。

炒飯を作り、一行の部屋に持って行く。

相変わらず暗い部屋だが、2人で食べる炒飯はなかなかおいしいものだ。

超機動少女カナミン（マジカルパワードカナミン）を一緒に視聴しながら炒飯を食べていると一行が唐突に言った。

「なア、兄貴」

「ん？どうした一行？」

「俺、今日外に行ってみて思ったんだ」

「？」

はにかむような笑顔で、一行は、

「やっぱり、通販がいいな」

「そげぶー！！」

「へぶっ！？」

愛ある拳は防ぐ術無し！！

vs三女(前書き)

現状 arcadia に投稿しているものの改訂版となります。

V S 三女

ピンポンパンポン

この作品は本編、『とある科学の事件体質』とはいつさい関係ないものだとご了承ください。

出てくる登場人物は本編とも、原作ともまるで関係ありません。

なお、本編をシリアス：ギャグ〃5：5といった感じなのに対し、この作品ではシリアス：ギャグ〃0：10です。

また、この作品は以下の要素を含めます事をあらかじめご了承下さい。

- ・登場キャラのほとんどがキャラ崩壊してます。

以上。

あと、若干設定を組み替えたところもありますが、この作品の流れとはあまり関係ないのでスルーしてもらえれば良いと思います。

とある科学の事件トラブルメーカー体質外伝
とある家族のオリジナル一家団欒 第2話

外からは小鳥の鳴き声が聞こえ、窓から差す柔らかな朝日は俺たち兄弟に朝を示していた。

さて、唐突だが、姉妹が美人だと損だつてよく聞くけどさ。正直な所、姉妹や兄弟が美人だろうがなんだろうと、どうでも良いんだ。ほら、あれだよ。どんなに花が綺麗でもさ、その花で出来る実がおいしいかどうかはわからないわけで。まあ、実がおいしければどんな醜い花でも俺的には構わないかなって感じなんだよね。それにさ、実がうまくなければ腹は満たされないってやつで、

「で、その心は？」

朝食がゲロマズい

「初めからそう言いなさいよおおおおおおお！！」

「ぎゃあああああああああああああああ！！」

朝からリビングに雷が落ちた。

もちろん俺は複数の能力で避雷針を作って避けたので、この叫び声は雷でゲームのセーブデータを消された一行によるものだ。

閑話休題

キッチンという戦場で俺と三女的美琴は朝から大怪獣もかくやという戦いを繰り広げた。

キッチンは荒れ果て、既にそこは戦場と成っていた。

端には踞った一行の横で四女のミサカがこちらを伺っている。

俺と目の前に立つ美琴の間には火花や電気が飛び散り、そこら中を焦がしている。

いや、物理的な意味で。

とりあえずさ、何がまずかったのかを考えないか？

これ以上キッチンを荒らして母さんにどんなお仕置きをされるか戦々恐々としている俺の提案に肩で息をする三女が頷いた。

俺の目の前にあるのは黒い物体。

通称、『^{ダークマター}未元物質』。

おかしい、これが作れるのは俺の兄貴だけの筈なんだが…。

「異議あり！ダークマターって言うてんのはお兄ちゃんだけでしょ
！」

そりゃそうだろ、被害にあってんの俺だけじゃん。

俺の言葉に三女はうっと呻くと押し黙った。

実際に三女の料理を食べているのは俺だけだ。

四女であるミサカは双子である三女的美琴が料理が苦手であることを当然知っているので、美琴が当番の日は自分の分だけ先に作っている。

一行は朝はパンのトーストしか食べないし、普段の五女と母親は必ず残る昨日の残りものを食べている。

ちなみに美琴が朝食当番の日に限って兄貴達や姉貴は何かと忙しいと言って外泊してくる。

ようは逃げているというわけだが…

つまり、美琴の料理の被害を被るのは俺だけということだ。

「おかしいなあ、今日はミサカと同じ手順で作った筈なのに…」

それでこうやってダークマターが作れる点ではある意味才能なのか
もしれんな。

「うっさいわー！」

っと、これでは話が進展しないな。

よし、ここは第三者の意見を聞いてみるか。

なあ、一行。一行さーん？そんなところでorzって格好してないで戻っておいで〜。

「お、俺の最強ドラゴンパーティーが…。五Vの性格一致ライアスが…。相棒のリザーンが…」

すっかりへこんでいる一行はこちらの声が聞こえていないのかぶつぶつと呟いている。

仕方なく俺はため息を吐くと、一行の肩を叩き、こちらに顔を向け涙を流す一行に微笑みを浮かべながら、

『ダークマター未元物質』（美琴作）！！

俺は手近にあつたブツを口にねじ込んだ。

「グはア！！？」

倒れる一行に一言。

食事中にゲームやるんじゃないやねえ。

いや、これ本当に大事ね。

世の中の家族間の絆が薄いとよく言うけど、食事中ってのは本来家族との交流を深めるべき場所であるはずだ。

そんな中で自分だけの世界に埋没するゲームをやるってのはどうかと思う。

「……………」

一行は突然の劇物に反射することすら出来なかったのか泡を吹いて

倒れた。

なんか紫色の泡を吹いてるけど、無視する。

「てか一行お兄ちゃんに第三者の意見とやらを聞くんじゃないの？とミサカはお兄ちゃんの冥福を祈りながら尋ねます」

「ちょっと、それじゃ私の料理が毒みたいじゃない！？」

「……………」

一口で気絶してる被害者を目の前にして未だに自分の犯行を認めないとは……。

美琴、オソロシイ娘！！

「というか、口にねじ込んだのは唯鷹お兄ちゃんでは？とミサカはまあお姉ちゃんの『ダイクマター未元物質』なら仕方ないかという心中を隠しながらフォローします」

「結局私をフォローしてない！？」

まあまあ、ミサカ。お前いつも美琴と一緒に料理作ってんだろ？何か問題点とかないのか？

「……………目に見える物は特には、とミサカは目を伏せます」

……………そうか。

と言う事は美琴の料理は何か超常的なことが起こっているというのだ。つまり、何をしても救いようが……………。

「ねえ、さっきからなんか酷くない！？」

気のせいだよ、美琴。

「せめてこっち見て言いなさいよ！」

「そっだよ、お姉ちゃん。とミサカはその通りだと言つことをあえて言わずに家族間の絆を保つ方向で言葉を繋ぎます」

「もう私の心がズタボロよ！！」

「冗談はさておき、とりあえず今度誰かに料理教わるか…。」

「そっだね、とミサカは絶望しか見えない未来をあえて見えてない振りをします」

「ねえ、だからなんかさつきから酷くない!？」

「酷エのは美琴の料理だろオ、常識的にk(ry:ぐぶっ」

気絶から目を覚ました一行が血反吐を吐きながら呟いた。

「誰が上手い事を言えと、ミサカはツッコみます」

「つまらない!！」

美琴了。今回の料理は微妙だったけど、まあ、前回よりはマシだったし。大丈夫さ。前回よりは上手くなってるから気にすんなくて。

アホ毛をしゅんとさせて哀愁を漂わせながら登校する妹にフォロワーを入れてみる俺である。

「……………本当？」

予想外に落ち込んだ声に俺は慌てて横にいるミサカとテレパシーを繋ぐ。

(おい、なんかものすごく落ち込んでんだけど!?)

(ちょっとからかい過ぎたかなあ、とミサカはお姉ちゃんのあのしゅんとした雰囲気こそするなあとか思ってたりするのを心中に) r
(y)

(いや、これ心中の会話だから。バレバレだから。てかお兄ちゃん
は妹がドSかもしれないという事実の方が驚きですけど!?)

(ミサカのごとは置いて…、とりあえずお姉ちゃんを励ます方

向で行くと良いと思うよ、とミサカは助言します)

ミサカはため息を吐きつつフォローをしてくれた。

「ええ。お姉ちゃんの食材選びも万全だったし、とミサカはフォロ
ーを入れてみます」

「料理自体はフォローしてない!？」

美琴はそう言いつつも嬉しいのかアホ毛が少しぴよんとはねた。

ああ、まあ半生野菜と黒こげハムを添えて砂糖と塩を間違えてる目
玉焼きだったけど…、食べなくはなかったしなあ。

再度シユンとするアホ毛。

ミサカの蹴りが俺の足にヒットする。

で、でも本当に悪くはなかったぞ。それに美琴が頑張ってたのは見
てたからな。また次回頑張ろう、な。大丈夫だって。

「…ありがとう」

それに、なにより、

「なにより?」

伺う様に前から尋ねてくる我が家の三女に、俺は笑顔で胸を張りな
がら応えた。

今回は一行の気絶タイムが五秒縮んだし!

「ふざけんなああああああああああ！！！！」
「ぎゃああああああああああああああ！！！！」

避雷針を作ったと言っのに…それすら無視してダイレクトに俺に電撃を当てるとは…成長…したな…美琴。げふっ。

どさりと俺は地面に倒れふす。

「遅刻するのでさくつと起きてくださいとミサカは電撃を当ててお兄ちゃんを起こします」

そんな俺に電撃を当ててこよつとするミサカの顔は妙な笑みが浮かんでいる。

ミサカ…倒れてる人間に追い打ちをかけるドSな子は感心しないぞ。あと既にお兄ちゃんに電撃は効かぬ！

能力による避雷針に加え、力場によってあらゆる電気を無効化する『インシュレーション気力絶縁』を使う俺に今や死角はない。

「む、ならば蹴りを喰らわせますとミサカは即座に渾身の一撃を放ちます！」

なんの！体術で俺に敵うと思っているのか！後、踵落としては止めなさい、いくら下着の上に短パン履いて「短パンを履いてないだど！？げふっ！

「残念、これは下着の上に履いた下着です。とミサカは頭をおさえ居るお兄ちゃんに勝利宣言を試みます」

「どっちにしても下着じゃないの！！それと朝っぱらからアホなコメントやってんな！遅刻するわよ！」

そう言えばそうだな。つと、そろそろ分かれ道か。

ミサカと美琴の通う中学と俺の通う高校は自宅から少し行った所で分かれ道になる。

いつもならこの辺りで妹達の後輩達が突進してきたりするが、今日はいないようだ。

そんじゃお二人さん、また後でな。

「それじゃ、とミサカは適当に手を振ります」

「じゃーなー、ってそうだ。お兄ちゃん」

お互いの通学路に向かっていこうとすると美琴が慌てた様子で声をかけて来た。

どうしたのだろう？

「あ、あの、私の料理のことお兄ちゃんの学校で言い触らさないでね？」

別にそんなことがバレた所で何の問題もないかと思うんだが…。
変な美琴だ。

(それが意外とあるんです、とミサカは思います)

(ほう、その意味は？)

(最近、お姉ちゃんが携帯ショップに行ったのは覚えてますよね、

とミサカは確認します)

(うん、最近やっと機械に触っても壊さなくなったからと言う事で
だろ?)

(その時にお姉ちゃんが携帯の使い方を教えてもらった店員さんが
お兄ちゃんの学校の生徒だったみたいなんです、とミサカは…)

(なるほどwww ちなみにそいつの名前は?)

(さあ、ミサカもよく知らないんです。ただぼさぼさの黒髪だった
のは確かです)

(ふーん、まあだいたい予想は立ってるけどねえ)

おおかた上条あたりだろう。

あのフラグメーカーなら人様の妹様だろうがなんだろうが関係なく
フラグを立てていく。

そう言えば先日も隣のクラスの女子達が十数人単位でやられたって
話が…あれ?何か腹の底から何か沸き立つ様な感情が。

ああ、これが…

(嫉妬ですね、とミサカは間の手を)

(違うから。単純にやっこのじゃじゃ馬女な妹にも人並みな恋の
季節が訪れたかという安堵だから)

(なんとという)

「お兄ちゃん?」

おっと、美琴をほっぽっちまったな。
まあ、そもそもこんなことを言い触らすわけ無いじゃないですか…。
妹が料理できないんだが…どうしよう。
ってどこの青春ヤロウですか？
まあ、でも面白いネタも拾えた事だし。

さて、どうしようかな？そっぴや俺の知り合いの黒髪野郎が料理が
苦手な子は嫌いだって言ってたな。

とでも言っておこうw

「なっ!？」

お、ショック受けてる。

我が妹ながら面白いなあ。美琴は。

それにしてもミサカの話は本当だったみたいだな。

(失礼な。ミサカはめったなことではウソは吐かないですよ？とミ
サカは…)

(そうかいそうかい。)

(むー、信じてませんね？とりあえずお兄ちゃん)

(ん？どうした？)

(御愁傷様です)

(へ？)

「お兄ちゃんのバカあああああああああああ！！！」

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

後で聞いた話だが、どうやら美琴は俺たちがテレパシーで話してる間ずっと俺に話しかけていたようだ。

俺はそれに気付かず、無反応で、勝手に自爆って勝手にキレた美琴は雷を俺に落とすというわけらしい。

おかしい、俺『気力断絶』すら使ってたはずなのに…。

後、「ようだ」とか、「らしい」とか使っているのは俺が雷を喰らって気絶したからで。

気絶して置いてかれたので俺は遅刻した。

「外で立ってなさい！！！」

涙目の母親に言われて俺はクラス中を敵に回したのだった。ちくしょう。

おまけ。

(やっぱりお姉ちゃんの泣き顔は良かったなあ)

お兄ちゃんに我俣言わないから！とか行って懇願してる時に半分涙目な美琴の泣き顔を思い出しながらミサカは悦に浸っていたそう。

V S 母親

ピンポンパンポン

この作品は本編、『とある科学の事件体質』とはいつさい関係ないものだとご了承ください。

出てくる登場人物は本編とも、原作ともまるで関係ありません。

なお、本編をシリアス：ギャグ＝5：5といった感じなのに対し、この作品ではシリアス：ギャグ＝0：10です。

また、この作品は以下の要素を含めます事をあらかじめご了承ください。

- ・登場キャラのほとんどがキャラ崩壊してます。

以上。

あと、若干設定を組み替えたところもありますが、この作品の流れとはあまり関係ないのでスルーしてもらえれば良いと思います。

とある科学の事件トラブルメーカー体質外伝
とある家族の一家団欒オリジンプレイヤー 第3話

雷に打たれながらもどうにか学校に着いた俺は母親である教師に涙を浮かべられながら叱責を受けて外に立たされた。

ちなみに、本来学生には勉強する権利なるものがあり、教師が独断で教室から追い出したり、外に立たせたりするのは権利の侵害に
なったりする。

もちろんベテラン教師たるうちの母さんもそれを心得ているが、今回は別である。

母さんの涙にキレた同級生一同に殺されなかったために外に自主的に出ているのである。

まあ、見た目12歳だしね。

皆、母性や父性が刺激されるのは仕方ないとは思うんだ。

でもさあ、あれうちの母親だからね!?

紳士的な変態の目で人の母さん見てんじゃねえ!

あれでも人妻だからね?

攻略不可能存在だからね?

おい、そこ、山田が偽名の人!

逆に良いとか言ってるな!

修羅場に母さん連れてくくな!

つと、落ち着け俺。

びーくーる。

びーくーる。

まあ、現実逃避はそろそろ止めて目の前の現実を見ようか。

「ふむ、そこで何をやっておる?」

目の前にはこの高校の生徒会長がいやがりしました。

どんな容姿かと言うと…何と言うか一言で説明い辛いんだが。

まず、美人である。

あ、意外とできた。

いや、ごめん大事な部分抜いたわ。

改めて、

まず、頭に応援団長と書かれた鉢巻きをして髪はポニーテールに肩まで伸ばした黒髪で、肩に生徒会長と書かれた学ランを羽織り、そ

の下には何故か「2 - A ひめがみ」と書かれた体操服を着てブルマを履いており、その下にはハイニーソ（黒）がある美人だ。

「もちろん、その下は水着だ！」

聞いてないよ!?

てか何で下が水着なの？

むしろ人の思考を読むな！

「ふん、私は生徒会長。」

ならば落下型ヒロインのみならず、義姉義妹義母義娘双子未亡人先輩後輩同級生女教師幼なじみお嬢様金髪黒髪茶髪銀髪ロングヘアセミロングショートヘアボブ縦ロールストレートツインテールポニーテールお下げ三つ編み二つ縛りウェーブくせつ毛アホ毛セーラーブレザー体操服柔道着弓道着保母さん看護婦さんメイドさん婦警さん巫女さんシスターさん軍人さん秘書さんロリシヨタツンデレチアガールスチュウワーズウエイトレス白ゴス黒ゴスチャイナドレス病弱アルビノ電波系妄想癖二重人格女王様お姫様ニーソックスガーターベルト男装の麗人メガネ目隠し眼帯包帯スクール水着ワンピース水着ビキニ水着スリングショーツ水着バカ水着人外幽霊獣耳娘サトリまで

あらゆる萌えを再現してもおかしくあるまい！」

いや、姫神さん。流石にその有り余る豊満な胸部でどうやってロリとかやるんですか？第一、あんた生物学的に女でしょ!?! シヨタは無理だと思っんですが!?!

「成せば成る！」

…本当にできそうに困る。

「ちなみに今の私は黒髪ポニーテールにバカ水着を着てその上に体操服を着たサトリ系の幼なじみ役である」

いや、単に服のセンスがおかしい人にしか見えない。
あと役とかじゃなくて普通に幼なじみでしょ、俺ら。

「そうとも言うな！はっはっはっはっは」

ため息が出る。

ちなみにこの会話、俺いつさい喋ってません。
てか普通に読心してるよ、この人。

確か能力って『吸血殺し』だよな？

つと、遅くなつたがこいつは俺の幼なじみの姫神秋沙ひめがみあいさという。

「昔から存在感の濃い人間で、よく俺はこいつに引つ張り回されてたのは良い思い出だ。」

まあそれでも俺にとつてはただの幼なじみなんだが。

とか思つてたのはちよいと昔までで、今の俺は秋沙の事を意識してるが秋沙からの反応は無しの礫だ。

それでも俺は良い。俺は秋沙の事を愛してるし、それがいつか秋沙に伝われば良いと思つてる。

ちなみにどれくらい愛してるかって言うと、

秋沙！秋沙！秋沙！秋沙ああああああわああああああああ
ああああああああん！！！！

ああああああ…ああ…あつあつー！あああああああ！！！！秋沙秋沙秋沙ああああわああああ！！！！

ああクンカクンカ！クンカクンカ！スーハー！スーハー！スーハー！スーハー！
ーハー！いい匂いだなあ…くんくん

んはあつ！姫神秋沙さんの黒色の長髪をクンカクンカしたいお！クンカクンカ！あああ！！！！

間違えた！モフモフしたいお！モフモフ！モフモフ！髪モフモフ！
！カリカリモフモフ…きゅんきゅんきゅい！！
小説10巻の秋沙たんかわいかったよう！！ああああ…あああ…
あつあああああ！！ふあああああんっ！！
アニメ2期放送決定されて良かったね秋沙たん！あああああ！
かわいい！秋沙たん！かわいい！あつあああああ！
コミックにも登場できて嬉し…いやあああああ！！にやああ
あああああん！！ぎゃああああああ！！
ぐああああああああ！！コミックなんて現実じゃない！！
！！あ…小説もアニメもよく考えたら…
あきさちゃん は 現実 じゃ ない？にやあああ
ああああああああん！！うああああああああ！！
そんなあああああ！！いやああああああああ！！はあ
ああああああん！！学園都市いいいい！！
この！ちきしょー！やめてやる！！現実なんかやめ…て…え！？見
…てる？表紙絵の秋沙ちゃんが僕を見てる？
表紙絵の秋沙ちゃんが僕を見てるぞ！秋沙ちゃんが僕を見てるぞ！
挿絵の秋沙ちゃんが僕を見てるぞ！！
アニメの秋沙ちゃんが僕に話しかけてるぞ！！よかった…世の中
まだまだ捨てたモンじゃないんだねっ！
いやっほおおおおおお！！僕には秋沙ちゃんがいる！！やつ
たよインデックス！！ひとりでできるもん！！！！
あ、漫画版の秋沙ちゃんああああああああん！！いやあ
ああああああああああああ！！！！
あつあんあつああんあインデックスうう！！み、美琴ー！！小萌
えええええええ！！！！
うううううう！！俺の想いよ秋沙へ届け！！学園都市の秋沙へ届
け！
いやん、そこまで言われると嬉しくてつい抱きついてしまっぞ？」

勝手に人のナレーション奪うの止めようか？

第一、確かに姫神が俺のことを引っ張り回してたのはあるけど、俺は嫌がってたよね？

ただの幼なじみっていうより俺の天敵な位置付けだからね？

それにその気色悪い求愛行動してるのそっちだけだし。

そもそもさつきから喋ってるの姫神だけだから正直ただの変な人だよ。

後、離れろっ！お前んとこのファンクラブにやっとただの幼なじみだっけ納得してもらったのに！

また嫌がらせを受けたらどうする！

「その時は私だけが味方だ！」

他全員は敵前提ですか！？

「って何やってるんですー！？」

しかもこのタイミングで母さん来ちゃったー。

「あら、小m…お義母様。ごきげんよう」

「ごきげんよう、ってそうじゃないです！何朝っぱらいちやいちゃしてやがるですかー！？そういうのは人目の無い時にやりやがって欲しいですよ」

母さん、微妙にツッコむとこ違うから。

それと姫神！さり気なくお義母様とか言ってるな！

「はあ、学校公認カップルが人目を気にしないのは知ってますからいいですけど。とりあえず、姫神ちゃんは他のクラスなんですし、

この時間は授業中ですから教室に戻ってください」

本人が認定してないから公認とは言いません、言わせません。

「なに、唯鷹が外で立ってる気がして、先生に幾つか論文を叩き付けてきましたので今現在私はフリーです」

どんな勘だよ！

てかはた迷惑にもほどがあるよ！？

姫神の論文を叩き付けられた先生もかわいそうに…

姫神のやつは普通に長点上機大学で教授として通えるレベルの頭脳があるからなあ。

こんな公立の木っ端教師が受け取って解読できるかどうか…。

「それでも唯鷹ちゃんは授業中なので教室に戻るんですー」

「先ほどまで立たせていたようですが？」

「一身上の都合ですー。もう戻ってもらいますー」

いやいや、母さん何だだっ子みたいな事言ってますか？

第一、今戻ったら「小萌先生を愛する使途の会（仮）」とか「姫神生徒会長を応援する会」とかの会員連中に俺は私刑に会うと思うけど。

うん、ちらっと教室の中を見て確信した。

視線だけで人を殺せるなら、今の一瞬で俺は数十回は死んだね。

よし、逃げよう。

というわけで逃げたわけだが。

「それで？またココに来たんですか？」

俺の友人であるエツアリが声と同じ呆れた表情で水晶を磨いていた。場所は部室棟と呼ばれる部室だらけの部屋の内の一室。呪いの道具（エツアリ談）やら魔術道具（エツアリ談）やらがある部室の中心に座るエツアリの笑顔は周りの道具と同様にどうしようもなく胡散臭かった。

「胡散臭いって失礼ですね」

お前もか、ブルータス。

人の心を読むんじゃない。

「君の場合は顔に出まくってるだけだと思いますけど。それにこの辺りの道具は全部れっきとした魔術道具なんですよ？」

いやいや、魔術とかwww

第一、何でこんながない学校の部室にそんな道具があるんだよ。

「それは、ここが占い研究部だからですが？」

普通の占い研究部には魔術道具が置いてあるのか？

「さあ？あるかもしれませんよ？」

はあ、胡散臭い。

「それでも正直な部類なんですけど…」

人の顔を被ってるヤツがよく言うよ。

「あれを見て未だに魔術を信じてくれないあなたがある意味すごいと思いますけど」

このエツアリ、名前の通り外国人である。

見た目は茶髪の優男風の東洋人だが、それは変装で実は黒髪ぼさぼさヘアの男で肌も浅黒いのが特徴だ。

つつても俺がこれを知ってるのは先日のとある事件が原因だが、今回は割愛する。

とりあえず、そんな風に自分の顔を隠すようなヤツなのでイマイチ胡散臭いのだ。

「はあ、それで今回はどの会を怒らせたんですか？」「小萌先生を遠目に愛でる会」、「姫神生徒会長をストーカーする会」ですか？」

何その怪しさ1000%の会!?

というか、よく知ってるな。

「これでも色々情報が入る位置にいますので。他にも「小萌先生の息子を闇討ちする会」とか「姫神生徒会長の幼なじみをぶち殺す会」とかありますが」

怖いわ!

つつか、ターゲット俺だよな、それ?

うわー、明日から通学路が怖いんだけど。

「冗談は置いといて、いい加減認めてしまえば良いんじゃないですか？」

どこから冗談！？

「姫神さんに文句なんてつけようが無いでしょうに」

ねえ、どこから冗談なの！？

…まあ、そりゃあ俺だって嫌いじゃないけど。

「お、脈は一応あつたんですね」

喜ぶな。顔を近づけるな。

気持ち悪い。

姫神は唯の幼なじみであって好きも嫌いもない。

「はあ、素直じゃないですねえ」

よし、ムカついた。

その優男顔を俺に殴らせろ。

ちっ。避けられたか。

「これでも一応スパイなもので」

自分でスパイと言うスパイはいない。

それにしても、お前こそそういう浮いた話の1つでもないのかよ。校舎を歩けばいつも女の子にキヤーキヤー言われてるくせに。

「……………」

ん？何その反応。
なに顔を赤らめてるんだ？

「実はですね、その最近…」

ま、まさかお前…

「じゃにちわー」

瞬間、何とも可愛い声に一瞬にして空気がぶちこわされた。

「……………」

あ、いつものエツァリに戻ってやがる。

閑話休題

さて、微妙な空気になっていた占い研究部の部室に乱入してきたのは長い銀髪のシスターさんだった。

どちらさんだ？

はっ、まさかこの美琴と同じ年くらいの少女がエツァリの！？

「いや、違いますから。それで、あなたはどちら様ですか？」

あ、何だ違うのか。

でも、そういう女性がいるのは否定しない、と。

「ッ……後で話があります」

こら、そんな悪人顔で言うな、シスターさんがびびってるだろ。

後、俺も怖いから止めてください、お願いします。

「え、えつと。とうまがどこにいるか知らない？」

ああ、あっちの方の被害者か。

「ここは部室棟ですよ？上条君がいるのはあちらの教室棟の方ですが」

「あ、そうなんですか。どつりで誰もいないと思ったんです。でもどうでしょう。とうまには朝食の時にあまり人前に出るなって言われてて仕方ないのであまり人目の無いこつちに来たんですが…あ、でもとうまの名字を知ってるってことはとうまのお知り合いですか？」

ん？何か色々気になる言葉が出てきましたよ？

朝食の時に？

んん？

「ええ、そうですね。えつと…上条君とどついつい関係で？」

「あ、申し遅れました。私、とうまの許嫁のインデックスって言います」

「ちよっ！反論の余地もない！？待て、落ち着けその武器は何だど
うやって使うつも…ぎゃあああああああああ！」

不幸だー、という悲鳴が聞こえてくる。
うん、せいせいした。

「あ、あのと、とうまッ？」

ああ、いつものことだから。
すぐに解放されるって。

ほら。言ってる内に出て来たよ。

捨てられたゴミのようにぽいっと投げられた上条が人ごみの中から
転がって来た。

そこに駆け寄るインデックスさん。

「とうま、大丈夫？」

「これが大丈夫に見えるのでせうか？」

「ごめん」

「というか、何でインデックスは学校に？来るなって言ったと上条
当麻は記憶を反芻するわけですが？」

「ああ、そうだった。とうま。忘れ物だよ」

そう言って手に持っていた包みを上条に手渡す。
瞬間、再度回りの人ごみから幾千の目が光る。

「私の手作りなんだから、ちゃんと食べてくれないと嫌なんだよ？」
インデックスさんの声は最後まで上条に届く事は無かった。
なぜなら、

「私刑！」

「ぎゃああああああああ！不幸だあああああああ！！！」

既に上条は人ごみの中にいたのだから。

もちろん、親友である俺は5発くらい殴ったり蹴ったりしたただけで許してやった。

閑話休題

それにしてもインデックスさんは料理ができるんですね。
うらやましい。

「それでも料理には自信があるんだよ。とうまの許嫁として家事全般は修行して来たもの」

なんでも上条のお父さんとインデックスさんの保護者にあたる方が大の親友とかで決闘の末に許嫁になることを決めたとか…どこの武闘家漫画だ？

「もし料理に興味があるなら私のブログを見てみるといいかも」

なんと、インデックスさんは料理ブログもやってるんですか。

うちの美琴に習わせたい。

…あ、でも美琴は上条が好きで……

あ、どうしよう。

と、思案した結果。

「うん、妹さんのためにも私も頑張るよ！それじゃ今度の休日にも行かせてもらうね」

頼んでしまった。

いや、これで美琴が上条を諦めてくれるなら。うむ。

ちなみにこの間上条は私刑のダメージで気絶してインデックスさんに膝枕してもらっていた。

うん、上条。

M O G E R O !

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9292/>

とある家族の一家団欒

2010年10月14日13時52分発行